

村中 信行

10月21日、空高く澄み渡った青空の下で、今年の「集い」は開催することができました。昨年は雨にたたられ、「集い」が終わった後に記念撮影する集合写真も断念しなくてはならなかったことを思うと、本当にお天道様のありがたさを感じます。昨年まで「集い」は「西松安野友好基金」と「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」が共催で開催してきましたが、「基金」の和解事業、活動は昨年末で終了し、解散しました。「基金」は8年間にわたって和解事業を実施し、日本と中国の間の草の根の友好を築いてきましたが、今年からは「基金」の広島での活動を担ってきた「継承する会」が単独で「集い」を開催することとなりました。

### 徐立伝さんのお孫さんが参列

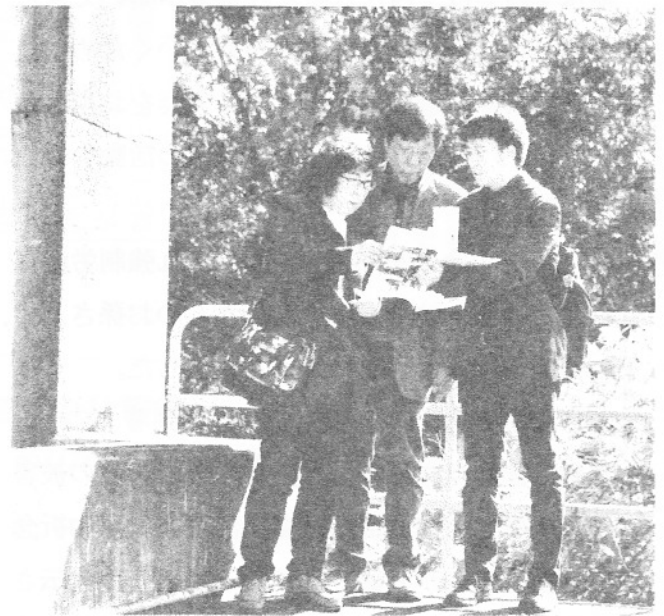
今年は中国から広島刑務所で被爆された(故)徐立伝さんのお孫さんの王小軍さんとその連れ合いである褚嘉超さんのお二人をお招きしての開催となりました。徐立伝さんは中国人に中国人を支配・管理させる分断政策の中で起きた収容所内の殺人事件に巻き込まれ、吉島の広島刑務所へ収容されている最中に原爆の被害に遭われたそうです。徐さんの証言がきっかけとなって、広島に強制連行された中国人の原爆被害の調査が進むことになりました。証言された当時の徐さんは歯茎のがんに冒されていて、日本での治療を希望されていたようですが、残念ながらその希望は叶いませんでした。あまりに時間が足りなかったのです。それにしても徐さんの証言は、広島における中国人の強制連行を掘り起こす活動にとって、貴重な一ページを開いた証言だったのではないのでしょうか。

「集い」の翌日、帰国する前に王小軍さんと褚嘉超さんのお二人を広島刑務所にお連れしました。刑務所は改修か何かで工事中でしたが、まだ一部分被爆

当時の塀が残っています。塀の前でお二人は中国での調査をされた川原さんの説明を感慨深げに聞いておられました。王小軍さんは徐さんから聞いた話と川原さんから聞く説明とを重ね合わせながら、当時の徐さんの苦労を忍ばれていたように見えました。

### 坪野フィールドワーク

「集い」の開催に先立って、参加者は安野発電所の上にある貯水槽を見学し、中国電力の職員から発電所の概要を聞きました。強制連行された中国人の苛酷な強制労働によって作られた発電所は今なお電力



坪野貯水槽で中国人収容所の当時の写真を確認する王小軍さん(左)と夫の褚嘉超さん(中)

を供給し続けています。貯水槽から降りてきた参加者は当時の様子を直接見聞きしていた栗栖さんからの証言も聞きました。

### 中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い

13時30分。「集い」の開催です。まず参加者一同黙祷を捧げました。

「継承する会」の世話人代表の足立修一さんが主催

者としてあいさつをされ、続いて受難者の遺族、王小軍さんがあいさつをされました。王さんはあいさつの中で「祖父は生前、子や孫を連れて労働させられた場所に行ってみたい、かつて受けた被害を見てみたいという希望を持っていました。そして、再び戦争をしないようにと願っていました。今日、私は家族を代表してここに来て、祖父が労働させられた場所に臨みます。記念碑の前で、昔の事をしのび、この地で犠牲となった死者の魂を慰めたいと思います。」と言われました。祖父の徐さんの願いは叶いませんでしたが、お孫さんの王さんは記念碑の前に立っておられます。長い時を超えて同じ安野の地に立った王さんにどういう思いが去来していたのでしょうか。私達は徐さんの願いを少しばかりは叶えることのお手伝いのできたのでしょうか。

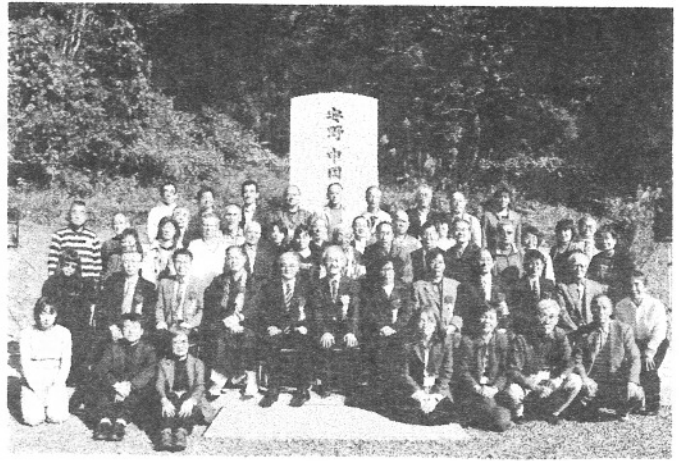
その後、安芸太田町長・小坂眞治さん、中国大阪総領事館総領事・李天然さん（メッセージ）、善福寺住職・藤井慧心さん、広島県教職員組合執行委員長・西迫利孝さんのあいさつを受け、竹内ふみのさんの二胡の演奏を背に受けながら記念碑に献花し、「集い」



献花する王小軍さん（右）と褚嘉超さん

は無事終了しました。「集い」が終了した後は善福寺で中国人犠牲者を悼む法要が執り行なわれました。

ところで参加者の中には山口県宇部市から「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の方々がおられました。この方たちは戦時中に朝鮮人労働者が犠牲にな



「集い」終了後に参加者全員で記念撮影

った宇部市の炭鉱（海底炭鉱）の水没事故（水非常）の事実を掘り起こし、当時の証言や資料を編纂し、追悼碑を建立され、さらに海の底に眠る遺骨の収集に向けた行動や学習会などに取り組んでおられるようです。こうした人たちの「集い」への参加には、何とか、励まされるような気がします。

また今年は「集い」の開催を準備するに当たって、地元の方の心強い協力もありました。6月の総会に出席された斉藤健三さんは安芸太田町の人で、今はもう退職されているが、町役場に勤めておられたそうで、当然地元のことも詳しいし、人のつながりもあるようでした。その斉藤さんがいろいろな協力を提案してくださったのでした。「集い」の日の当日も知り合いの人たち三人で来られて、会場の設営や音響機器の配置を担当してくださった。これまでも様々な人たちの協力や支援で続いてきた活動だと思いますが、こうした新しいつながり、広がりには本当に心強いです。そして安野の歴史が「会」の名称のように継承され根付いていけば、と願うのです。この歴史の継承が日本と中国の友好につながり、さらに平和へとつながっていると信じるのです。